日本国際経済学会第70回全国大会 (慶應義塾大学2011年10月22日・23日)

報告要旨

小浜裕久（静岡県立大学）

2011年3月31日

日本のTPP参加と農業改革・産業構造調整

「失われた20年」からいかにして脱却するか、それは大震災以前であれ以後であれ、日本経済にとって最大の課題であることに変わりはない．そのために最も大切なことは、「成功体験」の誤解とそれからの脱却である．

戦後日本経済を振り返るとき、「奇跡的な」戦後復興と高度成長は、いわゆる「産業政策」によってもたらされたものではなく、競争と民間部門のダイナミズムによってもたらされた．いわゆる「日本株式会社論」は間違いで、民間のダイナミズム、言替えれば市場メカニズムに基づいた効率指向的な経済運営を助長するような形で産業政策が行われたところに戦後日本の高度成長の秘密があった．それは、高度成長期の日本における「技術進歩の寄与度」の高さからも分かる．

現在の日本と高度成長期の日本とは、経済的にも社会的にも大きく違っている側面もあるし、共通している面もある．一番重要な共通点は、競争条件の視点だ．「失われた20年」の日本が再生するためには、技術進歩や生産効率の改善が不可欠である（戸堂 2010、4頁）．そのためには、TPPへの参加は、とても大切な政策判断であるにも拘わらず、TPP参加にも反対している政治家や専門家がいるのはなぜだろうか．これまでの日本の農業保護政策の最大の罪は、「やる気のある農民」の「やる気」を殺いでいることだ．食糧安全保障という政策目標があることは分かるが、それは日本国内で800万トンなり900万トンの米をいかに効率的に生産するかという問題であって、現在の農民構造を維持することとは無関係である．TPPに無条件で参加を表明することは外交交渉として稚拙であるという議論は理解出来る（中野 2011）．しかし、既得権益を壊して効率的な経済に転換するには、世界との競争が不可欠である．

市場開放への反対は、1950年代の日本にもあったが、1959年5月の経団連総会の会長挨拶で石坂泰三は、「商品、技術、資本の自由化は経済の究極の目標であるばかりでなく、現実の流れであるのに、日本ではこの流れに逆行して、『安易な産業の保護管理体制』がまかり通っている．　・・・　一例を外資導入政策にとってみても、極めて狭い見地からの産業保護政策や国際収支の問題にとらわれて機械的に運用を行っている．政府としては、もっと長期的かつ総合的視野にわたって大局を見失うことのないように特に強調する」と述べている（城山 1998、204頁）．

本報告では、いかに世界との競争を活かして日本経済を効率的な構造に転換するかを考える．市場競争が万能だとは考えていない．いかに必要とされる最低限の規制の下で市場競争の利益を引き出すかが問題なのだ．

文献

中野剛志『ＴＰＰ亡国論』集英社新書、2011年．

城山三郎『もう、きみに頼まない—————石坂泰三の世界』文春文庫、1998年．

戸堂康之『途上国化する日本』日経プレミアシリーズ、2010年．